

「web を利用した学生による授業評価」に対する回答行動の分析

西山裕美子

評価・分析室

Yumiko_Nishiyama@SU-OASIS.jm.shinshu-u.ac.jp

菊池聡

人文学部

内線 3239 skikuch@shinshu-u.ac.jp

要旨

信州大学の全授業を対象とした平成 16 年度前期の学生による授業評価は、従来のマークシート方式ではなく、新たに web での入力方式で行われた。その結果、学生の回答率は全体で 21%となり、従来の半分以下に落ち込んだ。このように web による授業評価の回答率が低迷した原因を探るため、全学の学生からサンプリングした質問紙調査を行った(有効回答者 551 名)。分析の結果、学生に対する周知努力が不十分であったこと、web 方式の方が用紙記入式に比べて利便性が高いと感じられていること、学生は授業評価の有益性を評価しており、結果が公表されることを強く望んでいること、などが明らかになった。授業評価に学生の参加を促し十分な評価点検データを得るためには、まず学生に対して授業評価がもたらすメリットの周知を行うとともに、評価結果のフィードバックがなされることが当面の施策として必要であると考えられる。

キーワード 学生による授業評価・web 利用調査・学生の動機づけ・回帰分析

問題

信州大学では、前後期ごとに全授業を対象とした「学生による授業評価」を行っている。平成 16 年度の 7 月に行われた前期科目の授業評価では、一部の学部を除いて、web 上の「キャンパス情報システム」を用いて、学生が授業評価を入力する方法が導入された。このキャンパス情報システムは、学生が履修登録や確認、シラバス閲覧、休講の確認などを行う web 上のシステムである。授業評価実施にあたっては、学生は自分の好きな時間に、パソコンや携帯電話で、このシステムに ID とパスワードを使ってログインし、自分が受講している授業の評価を、多段階選択肢と自由記述で入力する方法で行われた。ただし、入力時には、学生の匿名性は保証されることが表示されるようになっていた。

授業評価の対象となったのは信州大学の 8 学部と共通教育センター(以降、センターを含め部局と表記する)で開講されたすべての授業であった。ただし、人文学部と医学部はアンケート用紙に筆記式で記入させる独自の授業評価のみを行い、農学部では web 方式と用紙筆記式を併用して行った。

16 年度前期の学生の回答率を(web ないしアンケートでの回答件数)/(授業履修登録者数)で計算し、表 1 に示した。これを見ると、用紙記入方式の人文学部が 67.8%、両方式を併用した農学部の用紙記入が

48.9%であったのに対し、web の回答率は、3 つの学部で 10%に届かず、全体でも 21.5%という低い水準であった。

前年度までの授業評価はマークシート方式で行われたが、これらの回答率は全学でそれぞれ 14 年度前期 61.7%、後期 54.2%、15 年度前期 64.1%、後期 60.9%であり、今回の web の回答率の低さが目立つ結果となっている。

学生が自由に入力できる web 方式は、それまでの用紙筆記方式に比べ、1. コスト面で格段にすぐれ、2. 授業中にアンケートを行うことに比べれば授業時間を侵害しない、3. 授業での授業評価実施に非協力的な教員の授業でも回答ができる、などの多くの面でメリットがある。しかしながら、こうした入力率の低さは、コスト面で不利な用紙形式への回帰や、ひいては授業評価不要論へもつながることになる。

表 1 web 授業評価に対する学生の回答率 (%)

全体	共通	教育	経済	理	工	農	繊維	人文	農(紙)
21.5	25.0	30.0	7.0	3.6	15.3	3.3	42.5	67.8	48.9

*web の「学生による授業評価」入力推移よりのデータ・人文と農(紙)は用紙への回答率

ただ、この全体で 21.5%という入力率は、一見するとかなり低いものであるが、表 1 の回答率が履修登録者数を分母としている点に留意しなければならない。授業評価が前期授業の最後の時期に行われたため、登録後に途中放棄している学生でも履修者にカウントされるため、見かけ上の回答率は低くなる。一方で、授業時間中に十分な時間を確保して、教員がアンケート用紙を学生に配布して調査を行った人文学部でも、回答率はとでも 100%には届かない。web での入力率の低さは、こうした点から割り引いて評価する必要がある。

参考として、web 授業評価の回答率を(一件でも回答があった授業数)/(全授業数)とした場合の回答率を表 2 に示す。この場合は、一人でも学生が回答していれば、その授業では授業評価に回答されたとカウントされる。この結果を表 1 と比較すると、登録者ベースの回答率の低かった学部でも、用紙媒体での調査に匹敵する授業数で回答がなされていることがわかる。これらのデータからわかることは、一定の割合の学生は、自分が参加している授業の評価をコンスタントに web から行っているものの、全体としてそうした学生の数自体が少ないことである。

では、なぜ多くの学生は、授業評価を行わなかったのだろうか？web 形式での実施に問題があったためなのか、あるいは評価の必要が無いからと考えたのであろうか？本研究では、全学でのサンプリング調査を実施して、web 形式での授業評価の入力率が低迷した原因を探り、さまざまなメリットを持つ web 入力の授業評価を有効に実施・活用するための施策を検討する。

表2 授業数をベースにした web 授業評価回答率一覧(%)

全体	共通	教育	経済	理	工	農	繊維
64.7	95.7	41.3	84.8	79.4	45.0	43.0	94.8

*web の「学生による授業評価」入力推移よりのデータ

目的

- I. 平成 16 年度前期に行われた web 上での「学生による授業評価」(以下、「web 授業評価」)において学生の回答率が低調であった原因を探る。
- II. 学生の授業評価へ回答行動に影響を与える主要な要因を分析する。
- III. 学生による web 授業評価を有効に活用するための施策について検討し、具体的な提言を行う。

方法

予備調査

調査項目を策定するため、まず 20 名の学部学生に対して、今回の web 授業評価に対する認識や、授業評価自体に対する考え方を聞き取るインタビュー調査を同年の 11 月に行った。この調査から、学生の代表的な考え方を収集して整理分類した。さらに授業評価を扱った先行研究など(安岡・滝本・三田・香取・生駒,1999. 梶田,2000)から、授業評価行動に影響を与えると指摘されている要因を参考として質問項目の作成と精選を行い、本調査で用いられる質問紙を作成した。

本調査

対象者 各学部の 2 年生以上(専門課程学生)、および1年生(共通教育課程学生)を対象とした。web 評価を行わなかった人文学部と医学部の調査は行わなかった。学部ごとの学生名簿をもとに、単純無作為抽出法により、約 15%の学生をランダムに抽出した。抽出された学生に対し、4 ページ(共通教育のみ 5 ページ)からなる項目選択式 + 自由記述式の質問紙調査を行った。調査該当者には、各学部から事務掲示を通じて呼び出しが行われ、直接事務窓口から用紙が手渡された。呼び出しに応じなかった学生には郵送で配布された。対象学生は無記名で回答して、事務窓口に提出した。抽出された調査対象者は全部で 1186 名、最終回答者数は 551 名、回収率は46%であった。

質問紙の内容

予備調査を経て作成された質問項目すべてを論文末の付表に示した。質問紙では、学生の学部、学年、年齢、性別を記入した上で、大きく7(共通教育のみ8)項目の質問に回答を求めた。

質問1では web 授業評価に入力を行ったかどうかを、「すべてに行った」ー「全く行わなかった」の4段階で回答を求めた。

質問2では、質問1で「全く行わなかった」と答えた学生に、理由を10個の選択肢から複数回答で選択をさせた。

質問3では質問1で「多少は入力した」学生に対し、入力をするかしないかを決めた要因について9個の選択肢から複数回答可で選択させた。

質問4では授業評価を web 上で行うことについての意見を、8個の選択肢の複数回答可で選択させた。

質問5では、授業評価の実施をどのように認知したかに関する8個の下位質問項目について、それぞれ4段階で評定を行わせた。

質問6では、大学での授業や授業評価に関する13個の下位項目に対して、それぞれ5段階で評定を行わせた。

質問7では、授業評価について自由記述で考えの記入を求めた。

質問8は、共通教育で行われている「教員からのコメント公開」について、選択肢から回答を求めた。ただし、この質問8は一年生にのみ実施された。

以下、それぞれの質問項目に沿って回答結果を分析した。

結果と考察

授業評価実施の周知に関する問題点

質問1ではweb評価に入力を行ったかどうかについて尋ねた(図1)。その結果、「全く入力しなかった」と回答した学生は、過半数を上回った。

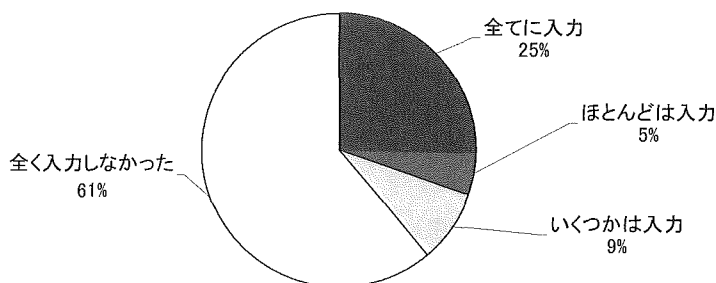


図1. 回答者551名のweb授業評価の入力の割合

質問1で「全く入力しなかった」と回答した者に、質問2はその理由を選択肢から尋ねた質問では、「Webでの授業評価があったのを知らなかった」と回答したケースが全体で20.0%あったことが注目される。特に回答率の低い学部で率が高く、半数以上の学生が授業評価の存在自体を全く知らない学部もあった。web評価の存在を知らなかった学生の率と、その部局の回答率の相関係数を求めたところ $r = -.41$ の中程度の負の相関が認められた(図2)。紙媒体を併用した農学部を除くと $r = -.50$ となる。部局数が少ないため相関の評価は難しいが、全体として授業評価を知らなかった学生の率が高いと、部局の回答率が低くなるという当然の状況が確認された。

評価の実施自体を知らなかった学生が相当数発生したということは、評価実施主体と学生との間の情報疎通に大きな問題があったことが示唆される。

この授業評価プロジェクトは、信州大学の本部組織である評価情報調査分析室(当時)が各学部の評価点検委員会と連携して実施したものである。これらの組織からは、事務掲示やポスター掲示などを通して学生への告知が行われているが、こうした掲示のみでは学生に徹底しないことは当然予想される。そこで、授業担当の教員による学生への直接的な働きかけが重要となる。しかし、このような大学本部や委員会主導の、いわゆる「上からの」プロジェクトに対して、現場の教員が積極的に関与するかどうかは、プロジェクトの意義についての認識が教員に形成されているか、が左右することになるだろう。そうした点で、「知らなかった」学生数がばらついたことについては、この教員の側の取り組みの違いが大きいと考えられる。

こうした背景のもとでは、教員による学生への働きかけと、学生の回答率の間には関連があることが予

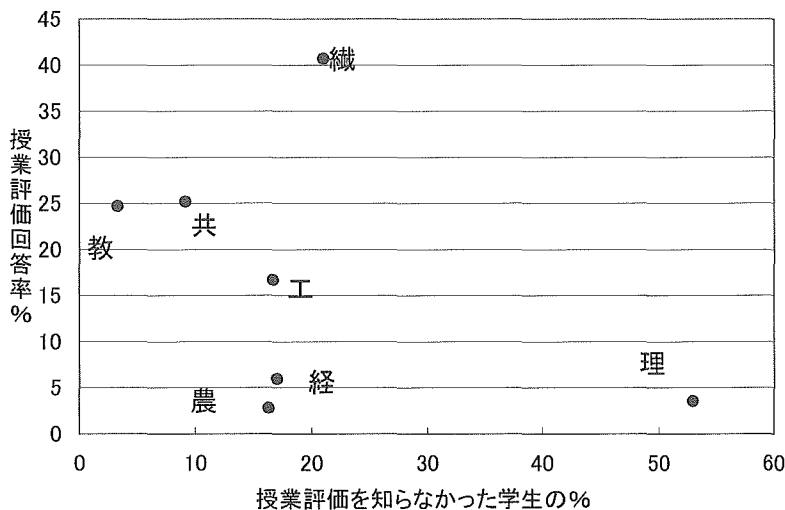


図2 授業評価を知らなかった学生の率と、授業評価の回答率の関係性

想される。そこで質問5では、教員がどの程度の周知努力や入力促進を行ったと学生が認知しているのか、すべての学生に尋ねた。たとえば図3に示した通り「教員から、Web 授業評価の方法や日程の説明があった」という質問に対して肯定的な回答をした率と、Web への回答率には高い正の相関があった ($r = .87$)。その他、質問5の主要項目に肯定的に回答した率と、該当部局の回答率の間の積率相関係数を求め、表3に示した。いずれの項目においても、教員の周知努力と、部局の回答率は高い正の相関を示しており、両者には強い関連性が認められた。

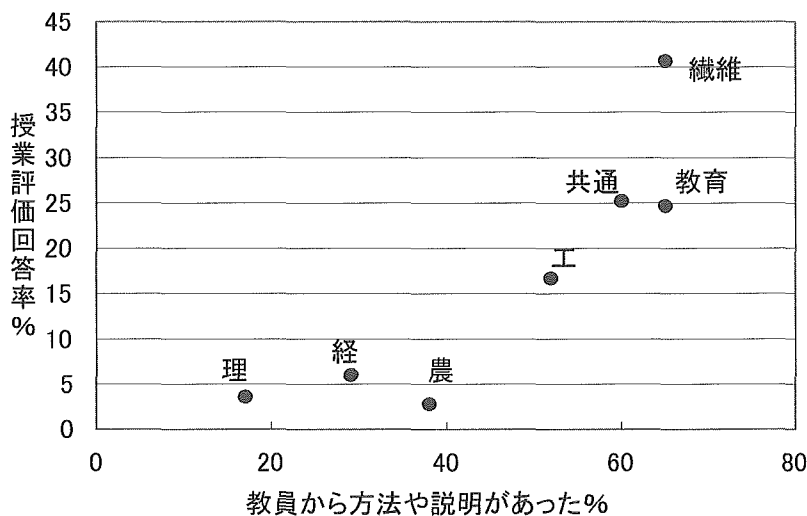


図3 教員の周知努力の認知と回答率との関連

表3 教員の周知努力や姿勢の認識に関する質問（質問5）に、肯定的な回答をした学生の%と回答率の積率相関係数

	全体	共	教	経	理	工	農	織	入力率との相関
教員から方法や日程の説明があった	47	59	59	27	5	50	24	55	.87
教員から入力するように促された	50	62	62	22	7	45	34	62	.88
教員のやる気を感じた	24	33	17	22	10	15	8	30	.72
ポスターや掲示を見かけた	56	68	57	47	19	43	66	58	.50
教員から授業評価の批判を聞いた	9	9	10	12	5	10	5	12	.71

表3に示したとおり、教員からの働きかけの認知は、学部による取り組みの差が大きい。用紙調査を併用した農学部を除くとしても、認知度が高い繊維・共通教育・教育などでは回答率が比較的高い。こうした部局では、教員が授業評価の意義を説明し、web への入力を促す努力を行ったことが反映していると思われる。

一方で、教員が授業評価に対して否定的な説明をしている場合も 1 割程度ある。自由記述によれば「Web 授業評価に入力しないように」と指示した授業もあったことが確認された。ただし「教員から、Web 授業評価に批判的な話を聞いた」に対する肯定率と、授業評価の回答率は $r = .71$ の高い正の相関を示している。この相関を見る限りにおいては、批判的な話を聞いた学生が多い部局ほど回答率が高い。おそらくこれは、たとえ批判的な話であっても、その学部の教員が Web 授業評価を話題として取り上げているのであれば、そのことが学生の回答行動を促したものと解釈できる。

これらのデータから指摘できるのは、学生の回答率を高めるためには、教員側が授業評価の実施やその意義を説明し、web での入力促進のためはたらきかけを行うことが必要と考えられることである。これはもちろん、各学部内で授業評価の意義が教員によって共有されていることが大前提である。授業評価の先進校事例（安岡他、1999）では、新入生にガイダンスを繰り返したり、授業評価について説明するビデオを制作するなどしたりして授業評価の意義を徹底し、適切な授業評価ができる学生を育てることに力を注いでいる。回答率の低かった学部は、適切な授業評価を促す努力がどれだけなされたのかを再検証する必要があるだろう。また、自由記述には「学部のホームページなどを探したが、授業評価へのリンクをみつけることができなかった」という指摘もあった。評価入力のための web ページと直結させるための、こうした工夫が、多くの部局でなされていないことも問題点として指摘できる。

授業評価入力を規定する要因について

質問4では学生自身のweb評価に対するとらえ方を尋ねた(表4)。これら学生の考え方が評価入力行動の違いに影響を及ぼすのかを調べるため、質問1(回答したかどうかの調査)の回答を目的変数として、授業評価を知っていた学生を対象に、重回帰分析を行った。

表4 学生の授業評価への印象が、web への回答入力行動に及ぼす影響 ($R^2=.119^{**}$)

	肯定率 (%)	標準偏回帰 係数 β	t	有意 確率
1. Web なら好きな時間に気軽に入力できるので、よい方式 だと思ふ	46.1	0.238	4.74	**
2. インターネットを使う能力がないので、参加しにくい	6.0	-0.012	-0.29	
3. 入力方法がわかりにくいので改善を要する	9.8	-0.026	-0.63	
4. 個人が特定されそうで不安がある	27.6	-0.217	-5.32	**
5. Web なら教員に関係なく自分で確実にすべての授業の 評価ができるので、よいと思ふ	13.6	0.151	3.60	**
6. 調査用紙に直接書いて評価した方がよい	30.7	-0.004	-0.08	
7. インターネットが使える環境が整っていないので参加しにくい	18.7	-0.022	-0.51	

重回帰分析は本来連続変量を説明変数とするが、ここでは便宜的に肯定的回答の有無という離散変量を説明変数とした。

** $p < .01$

分析の結果、質問 4 の各項目による回答行動に対する説明力は全体としては非常に低かった。しかし、項目の中では

「web なら好きな時間に気軽に入力できる」

「個人が特定されそうな不安」

「web なら確実に評価できるという認識」

の 3 項目が、それぞれ統計的に有意に回答行動に関連があることがわかった。

すなわち、好きな時間に教員に関係なく確実に入力できるというメリットを感じている学生は、実際に入力回答行動が多くなっていった。一方、現在の入力システムがログイン ID とパスワードを必要としていることにより個人が特定される点に不安を感じる学生の回答行動は低くなることが示されている。したがって、web 授業評価の告知に際しては、個人の特定が行われないことを強調して学生の不安を取り除く必要があると思われる。

授業評価への動機を減ずる諸問題

授業評価を知っていながら、全く入力をしなかった 6 割の学生 (質問 1「全く入力しない」と回答)は、なぜ入力しなかったのか? その理由を複数回答の選択肢で尋ねた (質問 2)とて、図 4 に示すようになった。

入力しなかった理由として選択された項目の 1 位は、「入力がめんどろ」なことであった。これは web 方式のデメリットと解釈されるかもしれない。しかし、全学生を対象とした質問項目 (4 - 1) では「web なら好きな時間に気軽に入力できるので、よい方式だと思ふ」に Yes と答えた学生の率は 46.1% であり、「調査用紙に直接書いて評価した方がいい」に Yes と答えた率 30.7% を上回っていることに注意すべきである。これらの点からは「めんどろ」感 は評価という行為自体が大きく影響を与えており、必ずしも web 方式のみに起因しているわけではないと考えられる。正確には「用紙への記入がどれくらいめんどろか」というデータと比較しなければならぬが、今回はそうした質問をしていない。ただ、少なくとも、web を用いるという方法自体に好意的な学生は半数にのぼり、用紙方式の支持を上回る点は重要なポイントと考えられる。

「自分は、うまくインターネットを使う能力が無いので」を、入力しなかった理由に挙げた学生は 6% にと

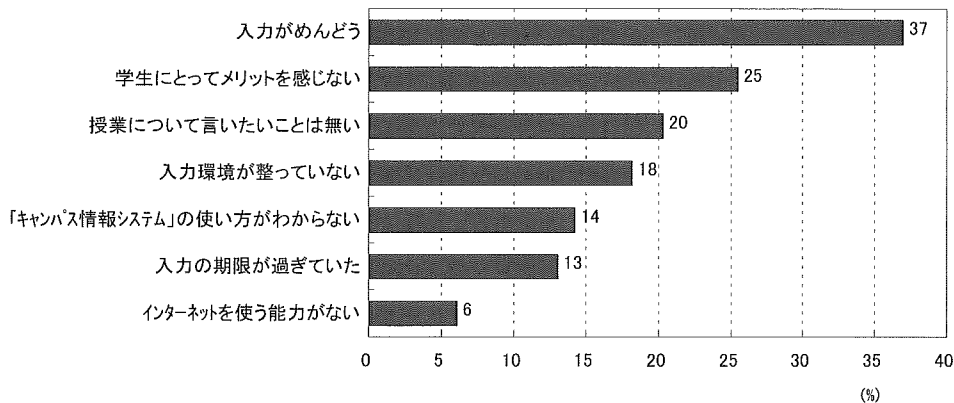


図 4. 授業評価を知っていた学生が全く入力しなかった理由

どまった。これらの学生に対するある程度の配慮は必要ではあるが、9 割以上の学生は授業評価に際してのネットの利用能力があることがわかる。また「キャンパス情報システムの使い方がわからない」という回答は 14%ほどであった。このシステムは、授業評価時点では完全に全学生に活用されていないが、翌年度からは受講登録やシラバス閲覧などに必須のシステムとなるため、以降は「わからない」という率は低減されると予想される。

これら質問 2 の諸項目への回答と、回答入力行動の関連をさらに明確にするため、質問 1 - 4「全く入力しなかった」か否かを目的変数とし、授業評価を知っていながら回答しない理由(質問 2 - 2~2 - 10)を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。

その結果、回答をしないという行動と統計的に有意な関係が認められたのは、2 - 6「キャンパス情報システムは使えるが、入力が面倒なので」($\beta = -.294, p < .01$)、2-4「授業について特に言いたいことはない」($\beta = -1.76, p < .01$)、2 - 9「授業評価をしても、授業の改善に結びつくような学生にとってのメリットは感じられない」($\beta = -1.75, p < .01$)の三項目であったことが明らかになった。

ここでの結果を総合して考えると、「評価がめんどろである」という反応はある程度やむを得ないが、2 位となった「授業評価が学生のメリットとして感じられない」点こそ、各部局の取り組みによって改善できる、そして改善すべきポイントであると指摘できる。すなわち、評価行動が結果として学生にどんなメリットをもたらすかが全くフィードバックされない状況にあっては、評価に対する動機付けは高まりようがない。また、かつて授業評価に参加した学生であっても、その結果が具体的な授業改善に結びついたことに実感がなければ、評価に対する無力感が高まり、積極的に評価に参加する意欲は高まらない。

これまでの授業評価のデータから、各学部で具体的にどのような授業改善のアクションが起こされたのかを、正確に学生に伝え、授業評価のメリットをアピールすべきである。この具体的なフィードバックをもとに、以降の授業評価への参加を呼びかけることが有効な施策だと考えられる。

授業評価に対する学生の期待

質問6では、授業評価に関する学生の期待と認識について、13個の質問項目、それぞれ5段階で回答させた(主な回答は図5)。半数以上の学生が、授業改善の必要を感じているし、授業評価が改善に役立つという期待を持ちながら、改善される見込みがないと認識している様子も見取れる。さらに、7割を超す学生は授業評価の結果が公表されることを望んでいる。学生は授業や自分の時間を割いて授業評価に協力しているのであり、その授業評価の結果と対応した改善策をフィードバックするのは大学の責務である。

また、質問6-7「自分が受講した、あるいは受講している授業の中には、教員が授業方法を改善すべきだと感じる授業がある」への回答は、いずれの部局においても、「ややそう思う」と「非常にそう思う」と回答した割合をあわせると7-9割に達する。

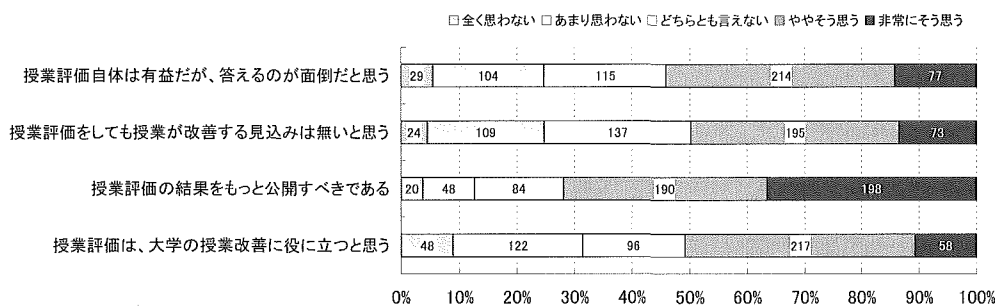


図5. 授業評価についてどう思うか

ただし、授業評価や授業改善に対する学生の意見は、その学生自身の学業への姿勢や能力によって、持つ意味が異なると考えられる。はたして学生が授業を評価する能力や資格を持つのかどうかは、授業評価に関する議論でも大きな論点の一つになっている(たとえば宇佐美,1999 など)が、少なくとも大学での学業に意欲的に取り組んでいる学生が持つ意見は尊重すべきであろう。

そこで、学生自身の自己評価3項目「授業に意欲的に取り組んでいる」「授業以外でも関連した学習を自発的に行っている」「授業にきちんと出席している」に対する学生の5件法での回答を1点から5点に換算し、この平均を算出して学生の「意欲得点」とした。これは、高得点ほど意欲的とみなす。

学生の意欲得点と、質問6における各項目の相関係数を求め、統計的に有意($p < .05$)と認められた .1以上の相関のみを表5に示した。これらは相関係数の値としては非常に低い、大学での学業に意欲的に取り組んでいる学生ほど、「2. 授業評価結果を公開すべき」と感じており、「6. 答えるのは面倒」だと思っていない。また、自分の経験した授業の中に「7. 授業方法を改善すべきものがあつた」と感じている。そして、この学生たちは「9. 信大の教育に全般的に満足」しており「10. 受験生に薦めよう」と考えていることがわかる。

また、「2. 授業評価の結果を公開すべき」は多くの項目と有意な相関がある。たとえば、「5. 授業の改善の見込みはない」「7. 授業方法を改善すべき」などと有意な正の相関があり、「信州大学の満足度」とは負の相関がある。

これらのデータからわかるように、勉学に意欲的に取り組んでいる学生は、結果の公開や授業の改善を期待している。授業評価の回答率を上げるだけでなく、こうした学生たちの期待に応える措置を、大学として考えなければならない。

表5 学生の学習意欲に関する得点と、質問6の各項目に対する回答の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均	SD
意欲得点		.10				-.12	.13		.15	.11	3.5	.8
1.改善に役立つ		.11		-.11					.21	.21	3.2	1.2
2.公開すべき			.13		.20		.29	.25	-.10		3.9	1.1
3.授業中にやるべき						.18					3.4	1.3
4.関係ない					.22	.13		-.10			2.8	1.2
5.改善の見込みはない							.23	.14	-.25	-.24	3.3	1.1
6.有益だが面倒											3.4	1.1
7.授業方法を改善すべき								.42	-.22	-.14	4.2	1.0
8.教育内容を改善すべき									-.36	-.11	3.7	1.0
9.信州大に満足										.47	2.8	1.0
10.学部を薦める											2.9	1.0

回答入力率が低いデータの活用について

質問1で明らかになったように、14%の学生は、受講している授業の中に「回答した授業」と「回答していない」授業があったことになる(図1)。このような選択が行われたのは、どのような理由によるものなのか、複数回答で質問(質問3)した結果、上位になった理由は図6の通りであった。

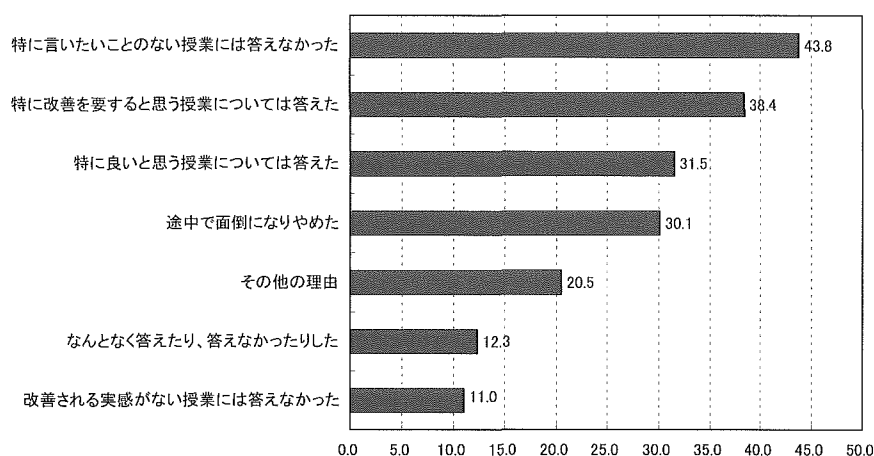


図6. 一部の授業のみ入力した理由 (%)

この結果からは、これらの学生たちがそれなりの理由によって評価回答すべき対象を絞り込んだ様子が見えてくる。すなわち、現在の回答には学生たちの意見が集約されていると考えるべきで、全体での回答率が低いことを理由に、すべての授業評価データを役に立たないものとするのは、早計と考えられる。

学生の自由記述意見について

質問7では、web 授業評価に対する自由な意見の記入を求めた。その結果を、記述内容別に分類して表6に示した。全551 対象者中、ここに何らかの記入があるものは261 名 (47.4%)であった。ただし、内容には重複もあるため、以下の記述の合計はこの数値にならない。

表6 授業評価に関する自由記述された意見

授業評価を支持する意見、授業評価の改善についての提言 (70 名程度)

「学生の意見が反映される」「授業が良くなる」という期待がよせられている。しかし、授業評価を支持する一方で、運用面に関しては「実施のアピールが不足」「結果をもっと公開すべき(公開しているならアピールすべき)」「授業評価の時期が不適當(評価の結果が自分の授業受講期間に生かされない)」「目的を明確にしてほしい(評価に対して改善の計画を提示するなど)」「授業評価の項目が不適當(実際の授業に即していない)」などの意見や改善案を示している。

授業評価に懐疑的、否定的な意見 (70 名程度)

ほとんどは「授業評価が実際の授業に反映されているとは思えない」というものだった。なかでもその原因を教員に対して感じているという内容が多い。具体的には、特定の教員を挙げて「授業評価の内容に触れて文句を(学生に)言った」「改善はしないと言った」など。「改善を要する教員ほど改善しない」という指摘もあった。

WEB での授業評価への評価 (20 名程度)

WEB でやることで「紙の無駄が防げる」、「時間が自由」という利点を挙げる一方で、「全員必須という気持ちにならない」「環境が整わない」「授業にきちんと出ていない人も評価に参加できてしまう」点を問題としてあげている。

教員に対する意見 (60 名程度)

授業の進め方、学生に対する態度、成績評価の仕方についての不満などがあげられた。授業評価には触れずに書いたものについて個別に集めた。具体的には「わかるように教えていない(板書、示し方、話し方)」「同じ先生の別の授業でも内容が同じ」などがある。

学校の設備、方針に対しての意見

授業に関して (20 名程度)

授業の受講に関する意見(とりたい授業が取れない、開催年が隔年で取れないなど)

授業内容に関する意見(専門性が薄い、知識に見合わないなど)

授業中の環境に関して(不真面目な学生に対する対応など)

その他

設備が古い・学務の対応が悪い・学内でパスワードが複数あるのが大変(図書館システム、キャンパスシステム)・シラバスの役割がうまくいっていない

教員からのコメント公開について

質問8では、共通教育の学生(1年生)のみを対象として、教員のコメントを公開するシステムの認識を訪ねた。共通教育では、学生による授業評価データを、対象となった授業担当の教員が閲覧した後に、学生の意見に対するコメントを書いて、専用のweb上で公開することになっている。このシステム上で、学

生は教員名や授業名から、教員のコメントのデータを検索して表示することができる。このシステムは、共通教育のホームページから利用することができ、授業評価実施時のポスターなどでも宣伝がなされた。

しかし、質問8の結果からは、共通教育学生 223 名中 20 人(9%)の学生しかこのシステムを知らなかった。また質問 8-2 で、ホームページで教員のコメントを見たことがあるかの質問には、わずか5名(2%)の学生しか見ていない。ここでも、学生に対する情報の周知徹底の問題が浮き彫りにされた。

一方で、質問8-3では、コメントシステムについて仕組みを説明した上で、評価を尋ねた結果、このシステムに肯定的な意見を持っている学生は過半数(71%)を占めた(図7)。

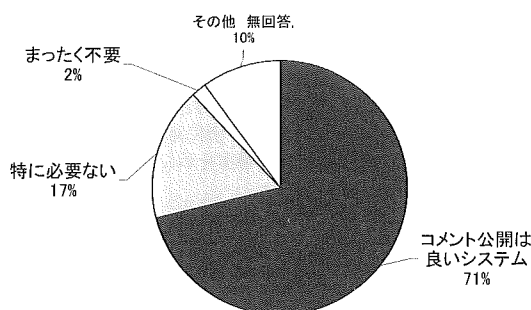


図.7 教員側のコメント公開に対する意見

教員のコメントに対する評価の理由を自由記述で尋ねると、良いシステムと答えた学生は、「教員の考えを知ることができる(授業について・学生に対して)」「学生の意見が一方通行でないとわかる(コミュニケーション面・授業評価のシステム面)」「授業評価の意味があるといえる(授業評価のシステム面・授業の改善の面)」というものがあつた。

これに対し、否定的な意見(特に必要ない・必要ない)では、「学生は見ない・知らない」というものが多く、その理由として「その授業はもう受けない」「うわべだけの回答である」「回答やコメントがあつても実際に反映されない」という授業評価自体を否定、疑問視するもの、あるいは授業評価の効果はないというものが多い。

その他の意見として、「学生の評価の結果自体も公開すべきだ」「教員のやる気によって違う」「授業で言うべきだ(ネットだと見ない)」という意見があつた。

まとめと提言

インターネットの普及により、授業評価に限らず web 上でさまざまな目的の調査が行われる例が増えている。こうした調査方法の違いによって、回答にさまざまなバイアスがかかることがCMC(Computer Mediated Communication)分野の研究から指摘されてきている。森・高比良(2003)のまとめによれば、web 調査では、認知的熟慮性・自己意識・社会的のぞましさ・攻撃性・自己開示・感情状態などの面で、従来

の調査方法とは違いが見られるとしている。高比良・森(2003)では、同一の内容の調査を、用紙記入方式と web 方式で、それぞれ実験室と自宅で行って結果を比較した。その結果、用紙と web というメディアの違いによって回答に見られる黙従傾向や極端反応には違いは見られなかったものの、自宅で回答した場合は、質問内容とは独立に中庸的な反応が増えることを見いだしている。今回の調査では、回答行動の分析が中心で、回答された内容自体の検討を行なうことができなかった。web での学生の意見収集は、今後の大学運営上、さらに必要性が高まることが予想されるが、メディアがもたらす回答内容の質的な違いを検討することも、今後の課題として必要となるだろう。

今回の検証調査で明らかになったことをもとに、今後 web での授業評価を進める上で全体的な提言を行うとすると、以下の点が指摘できる。

1. 授業評価の方法については、「用紙アンケートの方が良い」とする学生は 30%だったのに対し、「web なら好きな時間に気軽に入力できる点が良い」と答えた学生が 46%となった。今後の授業評価については、学生に対して web の評価チャンネルを用意しておくことを基本として、必要に応じて用紙形式できめ細かい情報を収集する形で補うことが望ましいと考えられる。
2. 回答率を高めるためには、委員会や事務窓口が告知を行うだけでなく、授業を担当する教員それぞれが学生の評価行動を促進するべきである。授業評価の周知を徹底し、学生には回答を促すなどの教員の積極的な姿勢が学生の回答行動へつながる。
3. 回答率を上げることに以上で大切なのは、学生の評価結果が実際の授業改善へつながることである。そのためには、授業評価データがそのまま放置されることなく、授業改善への具体的アクションがなされるべきである。アクションの内容は、それぞれの部局事情によって異なるものになるとしても、全学的なチェックが必要であろう。
4. 授業方法に対して不満感を持つ学生は非常に多い。学生の授業評価が授業改善に本当につながっているということを、説得力ある形で、学生にわかりやすく示す必要がある。この点こそ評価に協力した学生が求めているものであり、次の授業評価の動機付けを高めるためにも重要である。
5. 授業評価の結果の公開や教員回答の公開などの、学生へのフィードバックが具体的に準備されることが望ましい。
6. 学生による授業評価は、大学教育の質的向上のために重要な役割を果たすだけでなく、教員の教育指導能力の点検評価にも直接結びつくものである。これらにかかわる多様な課題に十全に対応できる全学的なインフラを整えることが重要な課題であると考えられる。

引用文献

- 梶田叡一 2000 新しい大学教育を創る 有斐閣選書
森津太子・高比良美詠子 2003 ウェブ調査と紙筆式調査における回答の比較 日本心理学会第 67 回大会発表論文集 102
宇佐美寛 1999 大学の授業 東信堂
安岡高志・橋本喬・三田誠広・香取草之助・生駒敏明 1999 授業を変えれば大学は変わる プレジデント社

付表 調査項目一覧。教示は簡略化してある。

質問1 今年の Web を利用した「学生による授業評価」に、受講授業の評価を入力しましたか？ひとつだけ○をつけて下さい。

- ・1-1 受講している授業のすべてに入力した
- ・1-2 受講しているほとんどの授業は入力した
- ・1-3 受講している授業のうち、いくつかの授業に入力した
- ・1-4 全く入力しなかった

質問2 質問1で「4.全く入力しなかった」と回答した方へ。当てはまる選択肢すべてにチェックしてください。

2-1 Web での授業評価があったのを知らなかった

以下は、知っていたけれども入力しなかった場合

- 2-2 自分ほうまくインターネットを使う能力がないので
- 2-3 インターネットを使う能力はあるが、入力できる環境が整っていないので
- 2-4 授業について特に言いたいことはないの
- 2-5 今回の「キャンパス情報システム」の使い方がわからなかった
- 2-6 「キャンパス情報システム」は使えるが入力がめんどうなので
- 2-7 「キャンパス情報システム」では入力した個人が特定されそうなので
- 2-8 入力しようとしたが、期限が過ぎてしまっていたので
- 2-9 授業評価をしても、授業改善に結びつくような学生にとってのメリットは感じられないので
- 2-10 その他の理由()

質問3 質問1で「2.ほとんどの授業は入力した」「3.いくつかの授業に入力した」方へ。なぜ、入力した授業としない授業があったのか、当てはまるすべての選択肢にチェックしてください。

- 3-1 特に良いと思う授業については答えた
- 3-2 特に改善を要すると思う授業については答えた
- 3-3 人数が少ない授業には答えなかった
- 3-4 改善される実感がない授業には答えなかった
- 3-5 特に言いたいことのない授業には答えなかった
- 3-6 途中で面倒になりやめた
- 3-7 ほとんど出席していない授業には、答えなかった
- 3-8 なんとなく答えたり、答えなかったりした
- 3-9 その他の理由()

質問4 「学生による授業評価」はインターネットで行われ、パソコンや携帯電話から評価を入力しました。この方法についてどう思いますか？ 当てはまる選択肢すべてにチェックしてください。

4-1 Web なら好きな時間に気軽に入力できるので、よい方式だと思

4-2 インターネットを使う能力がないので、参加しにくい

4-3 入力方法がわかりにくいので改善を要する

4-4 個人が特定されそうで不安がある

4-5 Web なら教員に関係なく自分で確実にすべての授業の評価ができるので、よいと思う

4-6 調査用紙に直接書いて評価した方がよい

4-7 インターネットが使える環境が整っていないので参加しにくい

4-8 その他()

質問5 今回の Web 授業評価について、それぞれあなた自身の経験をおたずねします。(1.全くなかった～4.非常にあったの4段階で評価)

5-1 Web 授業評価に対する教員の「やる気」を感じた

5-2 Web 授業評価実施のポスターや掲示を見かけた

5-3 友人・知人から Web 授業評価の話聞いた

5-4 大学のホームページで Web 授業評価ののことを見た

5-5 教員から Web 授業評価の方法や日程の説明があった

5-6 教員から、Web 授業評価に入力するように促された

5-7 教員から、Web 授業評価に批判的な話を聞いた

5-8 入力しないと成績に影響するかもしれないと思った

質問6 Web 上のものに限らず、学生による授業評価や信州大学の授業、あなたの授業に対する取り組みについてお尋ねします。(1.全くそう思わない～5.非常にそう思う、の5段階で評価)

6-1 授業評価は、大学の授業改善に役に立つと思う

6-2 授業評価の結果をもっと公開すべきである

6-3 授業評価は授業時間中にやってほしい

6-4 今後自分が受講しない授業の評価をしても自分には関係ないと思う

6-5 授業評価をしても授業が改善する見込みは無いと思う

6-6 授業評価自体は有益だが、答えるのが面倒だと思う

6-7 自分が受講した、あるいは受講している授業の中には教員が授業方法を改善すべきだと感じる授業がある

6-8 自分の属する学部・学科(1年生は共通教育)で展開されている教育の内容についてはさらに改善すべきだと思う

6-9 私は信州大学の教育には全般的に満足している

6-10 受験生に信州大学と自分の属する学部を薦めようと思う

6-11 私は授業には意欲的に取り組んでいると思う

6-12 私は授業以外でも関連した学習を自発的に行っている

6-13 私は授業にきちんと出席している

質問7 「学生による授業評価」や「大学の授業」に関して、ご意見を自由にお書きください。

質問8(省略)